

うちだ・せいぞう

1953年生まれ/神奈川大学卒業/東京工業大学大学院博士課程満期退学/日本近代住宅史/工学博士

著書に『あめりか屋商品住宅——洋風住宅開拓史』『日本の近代住宅』『同調会に学べ——住まいの思想とそのデザイン』

『間取り』で楽しむ住宅読本』ほか/1994年学会奨励賞、2004年日本生活学会・今和次郎賞受賞

私の専門は、日本近代住宅史。明治以降の開国に伴う近代化・洋風化の動きのなかで住宅と生活がどう変わってきたのか、ということテーマにしてきたつもりである。こうした研究を開始したのは卒業論文からだが、大学院修士課程に在籍していた頃までは研究者になろうとは思っていなかった。大学後の進路として住宅作家を夢見ていた私は、卒業論文として建築史を選んだ。感覚的にデザインを考えるよりも歴史的な流れを意識しながらデザインすること、いわば、デザインセンスのなさを理論武装によって補うことを考えたのである。

歴史から何を学べるかといった不安もあったが、とりあえず、住宅設計に直接役立つのは現在と密につながる近代だと考え、近代の住宅の歴史の勉強を始めた。当時出版されていた近代住宅史の基本文献は木村徳国博士の学位論文とそのダイジェスト版の『近代住宅史』(太田博太郎=編/雄山閣/1969)だけで、通史として近代を扱っているものも太田博太郎博士の『日本住宅史』(『建築学体系 住居論』所収/彰国社/1954)、だけで、平井聖博士の『日本住宅の歴史』(NHKブックス/1974)も出版されたばかりであった。こうした既往研究を理解するだけでいっぱいであったが、木村氏の研究にはとりわけ強い影響を受けた。すなわち、多くの建築史研究が様式史的観点からのもので、人々の生活ぶりがまったく見えないものだった。そのなかにあって、木村氏の住宅史は、生活に対する理念を軸にした分析が展開されていたからである。住宅史こそ生活が見えることが必要であると、生活史や社会史関連の文献などにも徐々に目を向けるようになるのだが、同時に、研究対象も上流層の住まいではなく、現在の住まいや生活に直結する中小規模のものに興味に移っていった。

こうして、研究を進めていくうちに、知識として歴史を覚えることなく、史料から新しい解釈を読み解くことが建築史であることも

知り、その新しい創造という世界への魅力もあって博士課程へと進み今日に至っている。今、振り返って、自分自身の研究が木村博士の魅力的な研究に近づけているのかどうかは、正直、わからない。しかしながら、現在の自分の役割として研究を少しでも進めることと同様に、住まいの魅力や生活の面白さをより多くの人々に伝えることも大切な責務ではないかと考えている。そもそも、自分たちが住んでいる住まいが、どのような過程で生まれてきたのか、過去の住まいとはどういう関係があるのか、こうした知識はまさに生活者にとっても一般教養として必要であろう。そうした知識があってはじめて、自分自身の生活が客観視できるし、未来も考えることができるように思う。そして、同時にこうした理解を通して、〈過去〉もまた大切なものであることが広く浸透していくように思えるからだ。そのためには、やはり、人々の生活の感じられる血の通った住宅史を描くことが求められるように思う。

いずれにせよ、現在、登録有形文化財制度の浸透に伴って、過去の建築物がより親しいものとなり始めてきた。学術的な価値が低いものであっても、時間を経た建築に多様な価値をみる時代が訪れようとしている。ただ、こうした時代ゆえ建築史研究はより精緻な研究が求められているように思う。すなわち、各建物の位置づけを示す裏付けがあってはじめて多様化に重み加わるのだと思う。そのため、多様な価値を受け入れる一方で、建築史研究者こそ建築史的観点から個々の建築の意味や位置づけを行う客観的な尺度を持たなければならない。建築史分野の研究は、しばらくは多様な建築をビルディングタイプ化し、そのタイプにおける変容の過程を解き明かす作業が求められるように思う。その意味で、個人的には、建築史研究は、その需要がますます高まるように思われるし、一層の社会貢献が可能であり、また、求められていると考えている。